

編集後記

「文化の日」として知られる11月3日、日本国憲法が公布された。1946年のこの日、戦争放棄を宣言した平和憲法にちなんで、「自由と平和を愛し、文化をすすめる日」として祝日に制定され、同憲法が施行された5月3日は「憲法記念日」となっている。

日本国憲法第9条には、「日本国民は、正義と秩序を基調とする国際平和を誠実に希求し、国権の発動たる戦争と、武力による威嚇又は武力の行使は、国際紛争を解決する手段としては、永久にこれを放棄する」と明記されている。

世界には、もうひとつ、戦争を放棄した国がある。それが、コスタリカ（Costa Rica）だ。北はニカラグア、東南は運河で知られるパナマと国境を接するこの国は、1949年に軍隊を廃止した。コスタリカには、軍事予算もなければ、米軍基地もない。自国コスタリカの平和維持だけでなく、周辺地域の平和構築にも尽力しており、1987年には中米の和平合意を主導したことでオスカル・アリアス・サンチェス大統領（当時）にノーベル平和賞が授与された。「平和憲法を持つ国は、自国だけでなく、世界を平和にする責任がある」とは、「平和の輸出」を実行するアリアス大統領の言葉だ。自衛隊、それに加えて米軍基地を持ち、1991年の湾岸戦争以降はその自衛隊を海外にまで派遣し、2024年度の防衛費予算を8兆円近くにまで増額した日本とは大違いである。

2024年10月、日本原水爆被害者団体協議会、略して被団協がノーベル平和賞を受賞した。受賞直後に組まれた特集のなかの、「ノーモア ヒロシマ、ノーモア ナガサキ、ノーモア ウォー、ノーモア ヒバクシャ」という、1982年に当時の代表だった山口仙二さん（故人）による国連での渾身の訴えは、当時も今も、聞く者の心を大きく揺さぶる。

日本政府は、ことあるごとに、唯一の被爆国だとのたまうが、その実、核兵器禁止条約に署名していない。核兵器禁止条約は、「平和の輸出」国コスタリカが率先して推し進めて成立したものである。

「戦争を放棄しよう。軍隊を廃止しよう。日本のどこにも、米軍基地は

要らない」。こんなことを言うと、必ず、「それは現実的ではない」などと言う人があらわれる。しかし、コスタリカという国は、平和のために行動を起こし、「平和の輸出」を実現しているではないか。戦争放棄や軍隊廃止を非現実的と決めつける方が、大海を知らない、いや、知ろうともしない井の中の蛙そのものではないか。

独善的に思考停止して努力もせず、大国に阿諛追従するのは、きっと楽なのだろう。しかし、その先に見えるのは、いったいどんな光景なのか。

戦争か平和か、ではない。戦争という選択肢は、あってはならない。

平和とは、権利である。

わたしたちは、どんなことがあっても、平和を守らなければならない。平和を構築していかなければならない。それ以外の選択肢は、ないのだ。

編集委員長 児島 峰